社会指標研究における、社会指標運動と「規範／記述」論争の位置づけ

見田朱子

1960 年代後半に起こった社会指標運動の中で、社会指標は規範的であるべきか記述的であるべきか、という論争があった。本稿の目的は、社会指標の定義に関わるこの論争の明確な整理と理解である。

既存の研究では、この論争の意味する所は、規範的な社会指標は可能か否かであったとされる。しかし、社会指標運動の展開及び論争自体の内容を詳察することで、本稿では次の点が明らかにされる。論争の対立点であった規範性の有無は、実際には対立点とならないものであったこと。社会指標運動自体の社会指標研究史の中での位置づけは、政策貢献を直接の目的とする新しい「社会指標」研究の出現期として理解できること。

これらの内容を当事者たちも正確に理解していなかったことが論争及び社会指標運動衰退の一因であること、今日に規範的社会指標研究が改めて取り組むべき本質的問題は社会指標の自律的構成方法にあることが、本稿において示される。

1　はじめに

1－1　問題設定

本稿の目的は、1960 ～ 70 年代に社会指標運動の中で行われた、社会指標の定義に関わる「社会指標は規範的であるべきか記述的であるべきか」という論争を、新しい観点から明確に整理することである。この論争を、以下では「規範／記述」論争という。

社会指標運動とは、1960 年代後半のアメリカで興った、社会指標構築のための諸研究活動の一群を指す。社会指標構築のための研究は、この社会指標運動前後も含めて数多く存在し、その研究の展開を追ってまとめた論考、書誌情報集も少なくはない（D. Johnston 1987; F. Andrews 1989; H. Noll & W. Zapf 1994; C. Cobb & C. Rixford 1998; A. Sharp 2000 他）。こうした先行研究における、社会指標研究史の中での社会指標運動の一般的な位置づけは、次のようなものである。つまり「社会指標」という語句は少なくとも 19 世紀まで遡って存在するが、社会指標運動は、その語句に初めて明確な定義を与えることを試み、社会科学的研究の対象とした活動である、と。「社会指標という語句は、米国芸術科学アカデミー宇宙委員会によって着手された試み [R.Bauer の *Social Indicators*(1966) を指す] の中で生まれ、その当初の意味を与えられた」（Land 1983: 2，傍点は斜体部.）。

しかし、1990 年代以降の記述には、この社会指標運動の詳細とその意義を社会指標研究史の中で新たな観点から捉え返そうという試みは

ほとんど表れない。1980 年代に社会指標運動は衰退し、特にアメリカでの「運動」は終了したというのがほぼ共通した認識であり、本稿もそれに異を唱えるものではない。しかし社会指標運動衰退の原因は、1980 年代の時点から考察が行われているものの、社会指標運動をより客観的な目で捉え返せるようになるはずの1990 年代以降にはかえって、既出の論点をまとめる程度の検討作業になっている点には物足りなさを感じる。

本稿では、社会指標運動において、特にそれ以後の社会指標研究のスタンスに大きな影響を与えた、「規範／記述」論争に注目し、その内容および顛末の明確な理解を試みる。この作業は、社会指標運動衰退の一因に関する新たな視点を付け加え、また社会指標研究における本質的な論点を明らかにするものである。この「規範／記述」論争は、既存の研究においては、「社会指標は、（社会に対して）規範的（評価的）であることができるか否か」という議論にしばしば重ねられてきた（Johnston 1987; Andrews 1989; Noll & Zapf 1994; Cobb & Rixford 1998 他）。論争の当事者たちも、この解釈と同様に自らの立場を理解していたようにみえる。しかし、このような意義付けは、議論の焦点を正確に表していないように思える。さらにこのことは、現在の社会指標研究が社会指標運動から学び取れることも少なくしていると思えるのだ。

「社会指標」は、それなりに長い期間、研究対象とされておきながら、一定の合意を得た明確な定義は確立されていない。本稿が扱おうとしている論争の結末が確定していないことも、その一因となっている。こうした基本的な諸問題に対して、本稿の作業が、一定の見通しを与えるものになればよいと思う。

１－２　本稿の構成

次章から、まずは本稿が注目する、社会指標運動における「規範／記述」論争の具体的な内容を示し、現在の社会指標研究の方向性にどのような影響をもたらしているかまでを確認する。第３章では、この論争がどのような構造の下に行われていたのかをみていく。前提として「社会指標」自体の構造（構成と利用の段階）を確認した上で、「規範派」と「記述派」という論争の両派の立場を詳察する。そして両者の対立点はどこにあったのかを確認し、「論争」自体の問題点を指摘する。第４章では、ここまでを踏まえて、社会指標運動が社会指標研究の中でどのような位置づけにあったのかを、改めて考察し、結論とする。

２　「規範／記述」論争

社会指標運動開始宣言は、R. Bauer の編著 *Social Indicators*（1966 ＝小松崎清介訳, 1976,『社会指標』）の発行とされる。Bauer は米国芸術科学アカデミー（AAAS）の宇宙委員会に所属し、そこでの研究の一環としてこの *Social Indicators* が発行された。そして 1969 年、O. D. Duncan が、*Social Indicators* に続いて興った数々の社会指標研究及びその発表を指して、もはやこれらは「社会運動だと考えることが有益であろう」（Duncan 1969: 1）と述べる。これ以降、1980 年代までの主にアメリカでの一連の社会指標開発に関連した研究が、社会指標運動と呼ばれる。

この *Social Indicators* において、社会指標とは「統計、統計系列、その他すべての形式の資料による」、「我々の価値や目標に照らして我々がどこに位置し、どこに向かいつつあるかを評価したり、また個々の計画を吟味して、そ

のインパクトを把握したりすることができる」（Bauer 1966=1976: 14）ものと定義される。社会指標の最初の定義として、この部分はしばしば引用されてきた（K. Land 1983, H. Noll & W. Zapf 1994 他）。

またこれに続けてアメリカの健康教育福祉省（DHEW）から発行された社会指標研究の成果報告書 *Toward a Social Report*（1969）では、以下の様に定義される。

> 社会指標は、ここで使用される語句としては、次のように定義されよう。それは、ある社会の主要な諸側面の状態について、正確で総体的かつバランスの取れた判断を容易にするような、直接的規範的関心の統計である。それはどのような場合にも福祉の直接的測定であり、それが「正しい」方向に変化しているのかどうか、他の物事はイコールのままで、物事がよくなってきているか、あるいは人々が＜よりよく（better off）＞あるか、ということの解釈に従う。ゆえに、医者の数とか警察官の数（number）についての統計は社会指標になりえない。その一方で、健康や犯罪の率についての数値（figure）は社会指標になりうるのである。（M. Olson 1969: 97，＜＞はママ.）

これらは、社会指標を規範的な性質をもつものとしている定義の典型かつ代表とされる。Olson（1969）の「判断を容易にするような」、「直接的規範的関心」、「福祉の直接的測定」、「『正しい』方向」などといった表現により明確に見られるように、社会指標は、規範性を含む判断の材料となる（統計）資料と位置づけられている。確かにこれと、Bauer（1969）の示す、社会指標は「我々の価値や目標に照らして」自分たちの状態を評価することと、計画を吟味することのために開発されるという内容は同じ方向性にある。

これらの社会指標の定義および研究において念頭に置かれていたことは、それが政策に貢献するものであるように、ということだ。もちろんそれは、これらの著作が、政府機関が企画し、成果発表（発行）まで予算を出して行われた研究成果であることに関係する。社会指標運動がアメリカ連邦政府の支援の下に始まり、継続されたことは明らかであり、それは後に、政府からの支援削減が運動衰退の大きな原因になったことにもつながる。

Olson の論考は、「よき決定は、事実についての注意深い評価に基づいたものでなければならない」（Olson 1969: 95）と冒頭に記される。社会指標に反映される規範によって当該社会を評価することが彼らの目的であり、それがつまり、政策貢献の手段であった。そのため、彼らがつくろうとする規範的社会指標は、評価的社会指標とも表されることがある。

社会指標運動の始めにこのように提示された社会指標の定義に対して、社会指標を「記述的性質をもつもの」と考える研究者たちは強く反発をした。「[社会] 指標の性質と目的についての、第一の、そして最も基本にある対立」（Cobb & Rixford 1998: 3）とされる「規範／記述」論争がここに始まる。「評価的／記述的」という分類（M.Carley 1981）もあるが、本稿では Noll & Zapf（1996）や Cobb & Rixford（1998）にのっとり、双方の立場の主張をするものを次のように呼ぶことにする。「社会指標の性質と目的」について、Bauer（1966）や Olson（1969）に見られるように、規範的なものと主張する立場を「規範派」、これに対して、以下に説明するように、社会構造や変動の状態を記述するも

のと主張する立場を「記述派」とする。

例えば規範派に対する記述派の典型的な批判として、Russell Sage 財団で社会指標を研究し、社会科学委員会（SSRC）の長官でもあった E. Sheldon は、同じく Russell Sage 財団の研究員の H. Freeman と共に以下のように述べている。

> タイムシリーズと構成要素の分解という観点を超えて、ある者によって――しかしその他の者たちはそうではない――その概念に置かれた多くの更なる制限は、信じ難いほどだ。ある者たちは、指標が直接的規範的関心というものでなければならないと主張する（健康教育福祉省 , 1969）。直接的という言葉を含むことは、ある興味深い疑問を持ち上げる。……もしもある現象の直接の測定ができたなら、それはもはや指標という語によって適切に記されはしない。
>
> あるいはより制限的で混乱しているのは、[社会] 指標が「規範的」でなくてはならないという立場である。明らかに、今日重要なものが来年もそうであるわけではないし、逆もまた同様だ。もしも直接的規範的関心の統計だけが保存されるのならば、近年には隠れていても後に核心的となる社会問題は、現存のタイムシリーズには含まれない、ということになろう。[社会] 指標が福祉の測定であることが必要だということも、同様に捉えられる。その言葉によれば、医者や警官の数は [社会] 指標とはみなされず、健康状態や犯罪行為の数値だけ [が社会指標] だとか、そういうことだ。しかし、もしも現在と未来の福祉サービスを算出しようとするならばその時、どれくらい速くあるいは遅く、共同資源の要員が開発されているのかを知る必要はないというのか？
>
> 更に、[社会] 指標は「方向性」をもつ必要があると主張される。一極が「よい」でもう一方が「悪い」という方向性だ。しかしある者の頭の中でよいというものは、別の者の視点では悪いものだ。その方向性が、異なる時代の人々……には逆に評価されるかもしれないことは言うまでもない。（Sheldon & Freeman 1970: 98, （）はママ, 傍点は斜体部, 「」は“”, [] は引用者による参考挿入（以下同）.）

ここでは、規範派の社会指標の定義――具体的には先の Olson による定義について、一つ一つ言葉を取り上げた批判が展開されている。記述派による規範派に対する批判の方向性は、Sheldon & Freeman（1970）がここに挙げている内容と概ね同様である。Land（1971, 1983）は、Olson（1969）およびこの Sheldon & Freeman(1970) の主張を取り上げて、後者に賛意を示している。こうした批判は特に、規範派が社会指標に「規範的」な性質を想定していることに集中した。社会指標が「福祉」や「よい」ものや「正しい」方向の基準をもつということ、そのことによって社会状態や政策を評価する手段となることに対して、である。Sheldon & Freeman（1970）は、「社会指標の効用についての誇大な主張」、「とても多すぎる期待と要求」などとこれを評価した。

それでは、記述派の想定する社会指標とはどのようなものであるのか。Sheldon & Freeman（1970）はこうした「誇大な主張」、「とても多すぎる期待と要求」を退けた上で、社会指標運動が貢献するのは「（１）記述的報告の伸張、（２）社会変動の分析、（３）未来の社会的出来事と社会生活の予想である」（Sheldon & Freeman 1970: 103）とする。この三つの課題の関係は「相互依存的」であり、「十分な記述

的報告が社会変動の探求改善のために不可欠であり、同様に、過去の社会変動に対するますますの理解が未来の出来事のよりよい予測のために要求されるのだ」（Sheldon & Freeman 1970: 103）とされる。

そこでは、(「相互依存的」というよりは)「十分な記述的報告」が最も根本的な要素として提示されている。その上で、社会変動の観察と把握、そして予測が目標とされる。

また、Land（1971）は（社会）統計と（社会）指標との違いに主に注目して、以下のように述べている。

> 経済統計は指標である。なぜならば、それが民衆の福祉を測定しているだけでなく、経済学者に経済の仕組みについての何らかを教えてくれるからだ。これと類似して、社会指標は社会学者に社会の仕組みについての何らかを教えてくれるものなのだ。
>
> 私が提案するのは、社会指標という言葉は次のような社会統計を参照するものだということだ。その社会統計とは、（１）社会システムモデルにおける構成要素（社会心理学的なもの、経済的なもの、人口学的なもの、環境的なものを含む）、あるいはそれの何か特別な部分もしくは過程の構成要素であり、（２）さまざまな時に応じて収集され分析され、そしてタイムシリーズに蓄積できるものであり、（３）モデルの詳述に適したレベルに統合あるいは分解できるものである。……重要な点は、次のことである。ある社会統計を社会指標として区別するための基準は、それの情報的価値なのだ。そしてその情報的価値は、社会過程の概念化の中で実証的に立証された、それ [社会統計] の結びつきから生まれるものである。……私は、この定義が、必要以上の制限も必要以上の包括性もないと信じているのであり、そしてある意味では、本稿の残りの部分は、このことの説明に費やされる。（Land 1971: 323,（）内ママ.）

ここにおいては、社会指標は「社会の仕組みについての何らかを教えてくれるもの」であり、つまりは社会システムのモデルを構成するものとされている。Land はこの数年後、「社会指標のための諸原理」として「社会政策原理」、「社会変動原理」、「社会報告原理」を挙げる。この中で社会報告原理に基づく社会指標の政策が最も「記述的」なのだが、「社会報告原理の重要性は、社会政策原理と社会変動原理の両方にとって、共通の背景を提供するその能力にある」とされる（Land 1975: 14）。そして、現在取り組むべき現実的な「社会指標」は、この最も基本的な「記述的」性質を持つものだと、以下のように主張する。

> 社会報告は、社会指標に対してなされてきた見込みのいくつかよりも野心的なものではないが、にもかかわらず、それは社会統計の体系的かつ定期的な使用の実質的な増加を象徴する。おそらく更により重要なことは、社会科学者たちの間で次のような合意が生まれることだ。それは、社会報告の伸長が、我々の現在の能力の範囲内にある社会指標の現実的な利用だということだ。（Land 1975: 14）

「記述的社会指標は、多かれ少なかれ政府の政策や計画の well-being 目標と直接に関係するかもしれないが、しかしそのような利用に限られることはない」（Land 1971: 6）と言われるように、こうした記述派にとっての社会指標研究の最終目的は、ある意味で規範派のものより

も壮大である。それは社会変動の観察・記録であり、あるいは社会というものの構造のモデル化であり、それでもって「社会の仕組みについての何らか」を理解することであった。この最終目的を達成するために、当面必要な作業として社会統計の整備拡充であることが主張される。この点は、記述派も規範派もほぼ合意する作業手順であった。しかし記述派は、この整備拡充された社会統計から社会指標が構成されるときに、その作業は「社会システムモデル」や「社会変動を把握するもの」のために行われるべきであり、それは結果的に政策貢献にもなるだろうが、しかし直接に政策貢献を目的として行われるべきものではないと主張する。それは、その政策貢献が社会状態や計画の評価をなくしては不可能なものであり、そしてその評価作業を科学者が行うことには、先に挙げた Sheldon & Freeman（1970）にみられるような理由から反論されるからであった。

結局、この「論争」は、記述派に対する規範派からの批判や反論は明確に見えないまま、「1970 年代に入った社会指標運動は、記述的アプローチの使用に概ね統合したが、現下の [社会指標] 運動の目標については対立していた」（Cobb & Rixford 1998）という状態になる。例えば Sheldon & Freeman（1970）が行ったような激しい批判は、規範派からは行われなかった。政局の転換から政府の態度が早くも変化してしまったことなどもあり、また当面の作業については合意を得たために、規範派独自の主張はすぐに、それほど目立たないものになっていく。Land（1983）らは社会指標運動の流れを振り返り、こうした「記述的社会指標」が運動の主流として、最も社会指標研究に貢献したとみる。「記述的社会指標の視点――データ、分析、モデルの生産を、それによって社会報告が伸長されるべく強調している――は、この 20 年間追求されてきた発展の最も成功に満ちた系列の一つである」（Land 1983: 22）。

社会指標運動は 1980 年代に終了する。その理由として挙げられているのは、不況による政局の変化と政府の支援削減、社会指標はその不況に対応できなかったことで、政府からも研究者からも失望されたこと、社会指標が掲げた目的が壮大すぎたこと、社会指標の理論構築ができなかったことなどである（Andrews 1989; Noll & Zapf 1994; Cobb & Rixford 1998 他）。これらの理由にはそれぞれに分析、検討が加えられてきたが、特に社会指標の目的や理論構築の可能性については、その後の社会指標研究だけでなく、他分野の諸研究のためにも検討されるべき点である。次章から、この点について考察をしていく。

社会指標運動終了後も社会指標の研究は、アメリカを含めた世界中で様々な規模と形で継続される。そうした中で社会指標運動の流れも何度か確認されるが、特に 1990 年代以降には、ドイツやオランダなどヨーロッパの社会指標研究者を中心に、この「規範／記述」論争の顛末が注目されてきた。例えば Noll & Zapf（1994）は、以下のように述べている。

> 今日の観点からすれば、社会指標の最も重要な機能は、福祉の測定と社会変化の趨勢の観察である。……
>
> 社会指標の第一の機能は、……福祉の測定である。……福祉指標としての機能、そして生活の質の指標としての機能それぞれにおいて、社会指標は諸個人に関係し、社会的目標を志ざされ、社会過程における投入（input）ではなく結果（output）を測定するべきなのだ。福祉指標として社会指標は、常に [諸個

人や社会的目標と] 直接的規範的関係をもたねばならない。……Mancur Olson が、彼の古典的定義の中で社会指標を次のように呼んだことが、この意味するところにある。(Noll & Zapf 1994: 3)

これに続けては、本稿でも先に挙げた Olson (1969) の社会指標の定義が引用される。「投入ではなく結果を測定する」方法は、ある計画や政策が目標に対してどれだけの結果をもたらしたかを測定するために、社会指標がとるべき方法として規範派が示したものだった。しかし社会指標運動の中では、投入と結果の区別は恣意的、つまり規範的で非中立的にしかなされないという記述派の指摘がこの方法を退けていたはずであった。

こうした論考に見られるのは、社会指標運動終了以後も継続されてきた社会統計の整備拡充作業を評価しつつ、それを土台に、社会指標運動の中では一旦排されたかに思えた規範派の目標を、記述派の目標に加えて再びとりあげようとする態度である[1]。こうして「規範派」、「記述派」の立場とその論争の展開は、今日の社会指標研究の方向性を決定する重要な論点の提示として認識される。

3 「論争」の構造

3－1 社会指標の段階と規範性の所在

論争の詳細を明らかにする前に、少なくとも本稿が捉える社会指標の構造を、前提として明らかにしておく必要があるだろう。また本稿では、これまで「規範（的／性)」という言葉を、当事者及び既存研究の言葉としてそれほどの吟味も加えず用いてきた。しかしこれ以降は特に、その言葉に関わる論争の構造を把握するに当たって、本稿としての「規範（的／性)」の位置づけ方を明確にしておく必要がある。しかし先に断っておけば、「社会指標」の明確な定義及び「規範（的／性)」のあり方については、本稿がその一助となれば幸いであるが、ここでそれを厳密に定めようというものではないし、また定められもしないだろう。

「社会指標」の研究には様々な段階がある。大雑把に考えても、まず社会指標を構成する項目や、その項目間の関係を定める計画段階、次にその項目に対して具体的なデータを与える調査や資料収集の段階が考えられる。また、データの数値化や図表化を含めた分析がなされ、さらに可能であれば、その結果から関係式や図表が作成されるだろう。場合によっては、これらの各作業の途中で、再び項目自体やそれらの関係性の検討に返らなければならない。このような社会指標構成の作業段階を踏まえて何らかの「社会指標」が作成されれば、次にはそれを利用して、当該社会に対する判断や解釈がなされる。

こうした段階の全てにおいて、判断、選別、評価という作業が必要になる。例えば一番初めの、その社会指標に採用する項目の取捨選択にも、その項目間の関係を定める際の重み付けや上位‐下位概念の設定などにもその作業は存在する。同様に、具体的なデータを得てそれを分析する段階での変数設定や軸の名称設定などにも、選別や評価という行為が存在する。こうした構成の段階を終えて提示された、具体的な社会指標が利用される段階にも、評価や判断と、その基準となる様々な「規範」が存在する[2]。

社会指標研究の各段階はそれぞれに重要であるが、本稿では特に、それらを社会指標の構成段階と利用段階とに大きく分けて把握する。このとき、規範性の所在はその各段階にありうる。構成段階において「規範的」であることと、

利用段階において「規範的」であることとは異なってありうるのだ。この点が、「規範／記述」論争とされるものの構造を把握し、社会指標研究史における社会指標運動の位置づけをする上で、重要なポイントになる。以下の整理の中には、より具体的な例も挙げられる。

３－２　主張の確認

次に、簡単に規範派と記述派の主張とその背景、研究母体や基盤、「社会指標」の捉え方などを確認しておきたい。

規範派

まず、社会指標運動の開始を呼んだ規範派について。規範派の社会指標作成の目的は、政策貢献である。例えば *Social Indicators* の中では、彼らの研究の由来は次のように述べられる。「かなり最近に至るまで、“統計”という言葉は依然、その最初の歴史的意味――本研究の主題と多少とも同一の意味――を有していた。…… “統計（statistics）”という語の語源は……現実的政治に関する研究を指す言葉」であったが、「最近の膨大な統計データの分類の大部分は、現在 [その本来の領分であるはずの] “国家の状態”という重要な問題について限られた意味を有していない」（A. Biderman 1966=1976: 95-6, “” はママ.）。従って、“国家の状態”を表すという役割を、別の言葉――「社会指標」が担う必要がある、とそこでは主張される。これはもちろん、先にも述べたように、規範派の研究はアメリカ連邦政府が企画し、支援してきたものであることに大きく関連する。

1950 年代からの経済的繁栄と科学技術の進歩を自覚したアメリカ政府は、「経済以上」の範囲での進歩を求め、次なる「偉大な社会（great society）」を目指すことにした。その際の、経済（指標）だけでは不足があるという認識と、宇宙開発計画にみられるような科学技術の著しい発達の認識は、社会指標というものの開発に目を向けさせた。D. Bell や J. Galbraith の議論も注目を集め、「成熟した社会」であるアメリカは次なる段階に向かう時機にあると思われた。*Social Indicators* も *Toward a Social Report* も、L. Johnson 大統領の「脱工業化社会」「偉大な社会」へ、という精神を社会指標研究の根拠としている。

このような状況の中で、規範派の社会指標研究は、アメリカ連邦政府の機関から発生した。政府に予算や人員の基盤を持ち、政府が政策に利用するための社会指標を研究するところに根拠をもってあらわれたのだ。もちろん政府外部にも同様の主張をする規範派は存在する。しかし社会指標運動の初期に、「規範派」の典型的定義や主張を大胆に述べてその方向性を打ち出したのは、政府の援助を受けた諸研究の報告であった。

直接の政策貢献のためには、当該社会が「『正しい』方向に変化しているのかどうか」を判断するための「直接的規範的関心」に基づいた社会指標の構成が必要である。それは、「社会の評価判断」に社会指標を利用するために、構成の段階における各「評価」作業にも、何らかの一貫した評価基準――規範の介入が必要だということだ。例えば、その時の為政者が大気汚染が弱いほどその社会は「正しい」方向にあると強く考えていたならば、その社会政策や計画策定のために構築される社会指標には、二酸化窒素や亜硫酸ガス、ダイオキシンなどの空気中濃度という項目が必ず加えられ、重いウエイトがかけられるだろう。更に、地域による濃度の比較が可能なように、また濃度の変化の原因究明が可能なように、必要なデータは揃えられるだ

ろう。これが社会指標構成段階での規範の介入であり、その基準（規範）に従って、「大気汚染」にまつわる項目に高い評価を与えるという評価行為である。そうして（他の項目もあるだろうが）構成された社会指標を用いて、当該社会の「福祉」を測定し、社会状態や施行された計画の評価を行い、社会政策や予算配分を新たに立案する際の根拠を得ることができる。これが利用段階において社会指標がもつ規範性である。規範派が想定する社会指標は、利用段階における政策貢献を第一の目的とし、そのために構成段階から一貫した規範性をもつ。

記述派

一方、記述派の目的は、社会変動の観察・記録、あるいは社会構造を明らかにすること、社会システムをモデル化すること、である。記述派では、中心的な論者の多くが Russell Sage 財団に存在した。この財団は 1907 年の設立だが、1910 年代には、社会調査や「共同体指標」の研究において重要な役割を果たしていた（Cobb & Rixford 1998: 6-7）。

「記述派」的研究は、研究史的に「規範派」よりも古い。1921 ～ 29 年にかけて H. Hoover 大統領付きの「社会動向についての研究委員会」が設置され、その研究は、社会指標研究のごく初期の重要な取り組みの一つとみなされる（M. Blumer 1983; Cobb & Rexfrod 1998）。その成果は、1933 年の *Recent Social Trends* という 1,500 頁を越える報告書として発表された。しかしそれは「社会動向について百科事典的な大冊」である一方で、社会動向についての研究委員会召集の動機となった、当時のアメリカ政府にとって最も愁眉の問題、「大恐慌が引き起こした巨大な問題群の、理解の仕方にも解決の仕方にも何の洞察も提供しなかった」と評される（Cobb & Rixford 1998: 8）。そのためにこの研究活動は「失敗」と位置づけられ、この恐慌と第二次世界大戦にかけて、政府の注目は経済指標へと移される。

しかしその社会指標研究史上の成果はある程度一般に認められ、この委員会の中心的メンバーであった W. Ogburn の考え方は、後の 1960 年代の社会指標運動において活躍する、Biderman、Duncan、Sheldon らを含む彼の生徒たちに引き継がれた（Land 1983; Cobb & Rixfor 1998）。特に Sheldon らは、Russell Sage 財団の研究員などとして社会指標の研究を継続し、社会指標運動においては記述派としての主張を展開させる。「社会事情の研究への彼 [Ogburn] のアプローチ――記述的で帰納的で擬似客観的（pseudo-objective）な――は、後年 [社会指標運動] において指標研究の優勢になった」（Cobb & Rixfor 1998）。Ogburn らの研究から記述派へ、手法は「客観的で科学的で、局部的であることで非難を受けない研究でなければならない」（Blumer 1983: 111）こと、「帰納的アプローチをこれら [社会動向についての研究委員会の] 科学者たちはみな好んだ」（Cobb & Rixford 1998: 7）ことが引き継がれる。

社会指標運動における「記述的社会指標は、見て取れる（apparent）事実の集合によって構成される――それら [その事実] は因果関係のどんな明確なモデルにも、どんな手段 - 目的関係にも、また資源配分についてのどんな予測理論にも基づかない」（Carley 1981: 24）とされる。「厳密な意味では、我々のアプローチはアメリカ社会の理論的なモデルを構成するものではない……我々は、純粋に仮定的な試みのようなモデルを構築することについては躊躇するよう、十分に経験的に志向している」（Sheldon & Moore 1966: 189）というように、手続きは、規範派が

Toward a Social Report で項目の体系を示すような一種演繹的な方法をとったことに対して、記述派は、経験的、帰納的に計画する。このことが「科学的中立性」のために重要であり、これによって中立的な社会変動モデルやシステムモデル（の要素）を構築できると考えられた。

また、規範派と同様に、政府の企画に研究の起源の一端はあったが、記述派の研究はよりアカデミックな意志をもって長期的かつ壮大な目標に向かうものであった。社会指標運動以前から社会指標の研究を続けてきた研究者たち、Sheldon ら Russell Sage 財団の研究者を中心とした彼らは、規範派の出現にはいささか戸惑ったことだろう。同じく「社会変動」への意識を前提としているものの、「直接の政策貢献」という、彼らとはまったく違う目的そして手法を掲げられ、しかもその流れは「社会指標運動」と呼ばれるまでに大きくなった。社会指標研究が活性化することは望ましいが、その方向性は、彼らが本来取り組んでいた「社会指標」の研究とは異なり、むしろ規範派が政府や他の研究者たちからの支持を得て「社会指標」の正統な研究と認められた場合、記述派の伝統的な社会指標の研究が軽んじられてしまう可能性もあった。

Ogburn らの失敗という経験から、政策貢献の可能性は記述派にとっても肯定せざるを得なかった。例えば「[社会変動の測定についての議論を] 進めるうちに、政策的な問題に、明確な注目がなされるはずだ。そこにおいては、我々は、変動の方向性に対するスタンスを少しばかり中立的でなくすることを許そう」（Sheldon & Moore 1966: 185）という言葉にそれは表れる。しかしこれは、あくまでも当初の目的のための社会指標――中立的な事実としての、社会システムモデルの要素であり、社会変動を把握する手段――がある程度完成されたとき、それが政策の立案や決定にも応用可能であろうという捉え方である（Sheldon & W. Moore 1966; Sheldon & Freeman 1970）。つまり記述派は、社会指標の構築段階においては（演繹的な）規範性の介入は認めないが、その利用段階においては、何らかの規範的な利用も認めるという立場をとっていた。

３－３　対立点と、論争の問題点

本節で確認するのは、「規範／記述」論争に関わった両立場について、対立はどのような論点にあったのかということだ。そのために、はじめに、「論争」になる両立場の共通点と相違点を振り返ってみる。

規範派にも記述派にも共通する点は、彼らの研究は社会科学としての研究であること、社会指標研究の根拠を、経済指標の成功と不足点および社会変動への意識に（記述派は変動の把握を、規範派は「偉大な社会」への移行促進を、それぞれ目的として）おいていること、そして程度の差はあれ、政策貢献の可能性をみていることである。また、1960 ～ 70 年代における目下の課題は、社会指標を支える社会統計の整備拡充である点でも合意がなされている。

相違点は、まず両者の研究史的背景である。記述派は、1910 年代から続く Russell Sage 財団の社会（共同体）指標の研究や調査、1920 ～ 30 年代に Ogburn らが行った社会変動把握の努力などを下敷きに、一定の方向性の研究蓄積がある。一方規範派は、1960 年代後半に社会指標運動を開始させる勢いをもったものであったが、それは研究史としては新しい社会指標研究であった。先述のとおり、規範派にとって、社会指標開発の根拠の一つは、「脱工業化社会」「偉大な社会」へ、というアメリカ政府及び社会の精神にある。それは、規範派の社会指標研究が、

1964 年の Johnson 大統領の俗に言う「偉大な社会演説」以降のものであることを示している。また前節で示したように、規範派はアメリカ連邦政府、記述派は Russell Sage 財団にその体制および財政の基盤、研究母体の重心があった。

そして両者は、直接のあるいは最終的な目的も、もちろん相違している。社会の状態把握は前提として、規範派は政策貢献を、記述派は社会変動の把握、あるいは社会システムモデルの構成要素を得ることを直接の目的としていた。この目的は、政治的なもの（規範派）と学術的なもの（記述派）とも捉えられる。

研究手法についても、規範派の作業は社会指標のモデル枠組みを設定することから演繹的な手順で始まろうとし、逆に記述派は経験的、帰納的に調査を繰り返して社会統計の整備拡充から目的を達しようとしていた。しかし社会統計の整備が遅れていることは規範派も懸念しており、当面の作業についてはその対策をするよう見解が合致した。

では彼らは何を争っていたのか。それは、第 2 章で見たように、社会指標を規範的性質のものとできるか否かという点である。より具体的には、社会指標で社会や政策、計画を評価することが可能か否か、である。この可否の対立は、直接には規範派の目的設定の可否と結びついている。社会指標が規範的な性質をもつことができないのならば、規範派の最終目的は達成不可能で、それは誤った目的設定となるからだ。しかしこの論争の結果として記述派が社会指標運動の主流となると、運動自体が衰退が起こってしまう。

これについては、社会指標運動衰退の原因とも関連して、既存研究の中で次のような考察と整理がなされてきた。まず規範派の政策貢献という目的のためには、社会状態やそれに対する計画の評価が必要である。特に、「偉大な社会」という社会全体の長期的な目標を具体化し、それに至る道を具体化する方法としての社会指標には、その評価の基準に普遍性が必要とされる。しかしそのような基準は、社会指標の研究過程で定められるものではない。「社会指標は、決して価値中立的ではなく、常に [少なくとも研究者による] 価値判断を含む。問題定義や指標選択の中に暗示的にであれ、価値への重み付けの公的な枠組みの中に明示的にであれ」（Carley 1981: 173）ということがその根拠として挙げられる。

しかし記述派から提出された目的、社会構造や社会変動の把握には、社会学全体にかかる研究テーマに直結してしまっているという曖昧さがある。記述派の手法を採った社会指標運動の衰退の原因として、一つはこの点が「社会科学と公的統計における他の領域の中での、[社会指標研究の] 思考、概念、方法論的基準の拡散と、ある部分の日常化」（Noll & Zapf 1994: 10）と表される。さらに、とりあえず合意に達した社会統計の整備拡充という作業は「社会現象を説明するに当たっての、記述的指標の本来的な弱さ」を見せ、「その報告書の、重要な観客をひきつけることにおける無能さ」（Johnston 1987: 299）などと評される報告書の発行にしかならなかった。このことが、もう一つの原因として挙げられる。

結局、両派のどちらの主張を採っても問題が起こった。このことが「社会指標研究における、解決できない方法論的そして理論的諸問題」（Noll & Zapf 1994: 10）として、社会指標運動衰退の原因であり、圧社会指標研究自体の行き詰まりとして捉えられてきた。

しかし、その理解は全面的に正しく、それでこの対立、論争は全てが解釈されつくしているのだろうか。本稿ではこの論争を、社会指標研究における規範性の所在に対する、両派の想定の相違と

いう観点から整理してみる。社会指標の段階別に沿った規範性の所在について規範派と記述派の想定をみてみると、以下のように捉えられる。

規範派は、社会指標の構成段階および利用段階の両方に、利用段階における評価の行為者による介入を認めている。むしろ、政策貢献という目的をより効果的に達成するためには、その介入は認めなければならない。

記述派も、社会指標の社会評価への利用は否定しない。「科学者は、[社会の] 変化を観察、あるいは予測くらいはすることはあっても、変化を評価することに対して、いかなる特別な資格ももたない」（Sheldon & Moore 1966: 187, 傍点は引用者による.）というように、社会指標の規範的利用に科学者が関わることを否定するのみである。

しかし記述派にとって最大の目的は、社会指標で「社会」の全面的な構造や動向を捉えることにある。従って、政策貢献はおまけの利用であり、特定の政府への政策貢献のために、政府の規範に従った社会指標の構成をすることは許されない。このことが、「社会指標に対して、それが規範的であること、福祉の測定であることという定義は、制限的過ぎる」という言及となる。しかし記述派によって否定されているのは、前節でも述べたとおり、正確には、社会指標の構成段階における規範性の介入だけである。

つまり両派の正確な対立点は、社会指標の構成段階に規範的介入が認められるか否か、と表せる。さらに確認しておけば、この介入の可否が問題となる規範性は、科学者のものではなく、社会指標を評価に利用するもの（例えば為政者）の規範性である。

これらの点、つまり「『規範的』であること」が構成や利用という社会指標研究の各段階のどこにおいて、誰の規範あるいは評価として想定されているのかという点は、論争当事者およびその後の整理の中でも明確に捉えられていなかった。従ってこの「規範／記述」論争については、「社会指標を評価に利用する者（例えば為政者）たちの、構成段階からの規範的介入」という論点が分節化されず、単に「社会指標は規範的な性質をもってもよいのか」、「社会指標は社会の評価ができるのか」という漠然とした意味づけがなされたのだ。

この問いに対する答えを「否」と確定させることで、社会指標運動の中では記述派の主張が主流となった。その答えの最大の根拠は、構築の時点でどうしても何らかの価値観が入り込んでしまう社会指標を、「社会」という広範囲に普遍的な規範的判断の根拠とはできないことである。この指摘自体は、科学的に正しいだろう。しかしこの論理に規範派が反論できなかったことは、自身の立場を明確に把握していなかったことが原因である。

「社会指標を評価に利用するものの、構成段階からの規範的介入」が政策貢献という目的に限っての手段として明確に分節化されていれば、規範派は、この介入の手段としての妥当性を主張できたはずである。それが可能だからこそ、例えば「福祉指標」のような社会指標の成り立ち方が可能であり、逆に、中立的に社会構造や社会変動を記述するという目的の遠大さとが、「解決できない方法論的そして理論的諸問題」ともなるのだから。このような認識は、現在の社会指標研究が「規範派」的手法を再考し始めている根拠にもなる。

また、社会指標研究の目的についても、その並列的な関係が把握されていなかった。規範派の「政策貢献」と、記述派の「社会システムモデルの要素構築」あるいは「社会変動の把握」は、規模は異なるものの、並存しうるものだっ

た。政策貢献のために作成される社会指標と、社会システムモデルの構成要素としての社会指標は独立に構成可能であろうし、ややこしければ名称を適切にすればよいはずだ。実際に、社会指標には「福祉指標」「地域指標」「行政（評価）指標」などの別称が見留められる。

目的の異なる「社会指標」の並存の可能性は、明示的にではないが意識されてはいたようだ。Land（1975, 1983）、Carley（1981）、Sheldon & Freeman（1970）らは、社会指標の「性質」、「目的」あるいは「原理」として、批判的であるにせよ、「政策貢献」や「（社会）評価」を、「社会変動」や「社会システムモデル」や「社会報告」などに並んで挙げる。しかしその上で、「政策貢献」や「評価」という目的は一歩退けられる。社会指標運動において、社会指標の目的は、「規範的」か「記述的」のどちらかに絞られようとしたのである。

本来は並存可能であった「社会指標」の種類が、どちらか一方こそが正統なる「社会指標」であるかのように争われる。このような問題を惹き起こしたのは、その始まり、社会指標運動の開始時点の規範派による気負いこみすぎた「定義」にあるだろう。社会指標運動が自覚的な科学的社会指標研究の始まりと捉えられる根拠の一つは、「社会指標」というものに対する厳密な定義の設定が試みられた点にある。しかし、そこでは「社会指標」というものに対する「制限的過ぎる」、「規範的」定義が相対化されないまま、なされたのだ。

その一方で、この問題を固定化したのは、記述派の主張である。この挑戦的な「定義」を受けて立った記述派は、自らのスタンスを明確にするため、そして次にはそれを正当かつ正統なスタンスと主張する過程で、規範派との対決図式を作り出してしまった。

社会指標のあるべき姿を、「規範的」か「記述的」かのどちらかに決めようとした両派の態度が、「規範／記述」論争を惹き起こした。考慮すべき本質的問題は双方に存在するが、「中立的な記述的社会指標の研究は、どのような道筋で社会全体の構造や変動を捉えるに至るのか」、そして「構成段階からの規範的介入を認めた場合、どのようにして社会科学者としての構成判断の自律性を保つのか」といった、理論的整備、発展に資する内容でこそあれ、対立すべきポイントではないはずだ。本来対立の必要はなかったにもかかわらず論争がこのような形で起こってしまったことで、規範的社会指標についても記述的社会指標についても、その可能性についての本質的な検討がなされないままに、その論争には「決着」がつき、やがて社会指標運動自体の衰退と終了を呼んでしまった。

社会指標運動はアメリカ連邦政府の支援の下に開始され、活性化していたものである。政策貢献という目的が直接に否定されたことは、政府にとって社会指標研究を支援する意味がなくなったも同然であろう。「解決できない方法論的そして理論的諸問題」はまた、このように「科学的に」は規範性を否定することを是としながら、「運動」としてはその否定が衰退を招いたジレンマ、であり、さらに「単なる」記述的社会指標が、政府にも政治家にも役に立たないとみなされた結末自体でもあった。

4　社会指標運動における「社会指標」

最後に、以上のことを踏まえると、社会指標運動とは社会指標研究史においてどのような位置づけができるのか、改めて考察しておく。

現在、社会指標研究の起源を辿ろうとすれば、1920 年代の Ogburn らの試みもしくは 1960 年代からの社会指標運動に始まりを求めること

が妥当とされる。前者にその起源を求める場合にも、社会指標運動は、社会指標研究の第二の始まりとされる。

しかし本稿では、これに対して異なる視点を挙げたい。それは、社会指標運動の特殊性である。社会指標運動の始まり方と終わり方から、それは明らかに連邦政府の意向と支援から離れることのなかった「運動」だったことがわかる。逆にいえば、政府の意向から離れてあった社会指標研究は、社会指標運動の「終了」後も様々な形で継続されている（A. Ferriss 1988; Rothenbacher 1993）。従って、社会指標運動における「社会指標」は、政策貢献のための社会指標であり、社会指標運動を形づくった諸研究は、政策貢献のための社会研究であったという位置づけが考えられる。

社会指標運動は、それまでの「社会指標」研究の歴史を引き継いで、その正当かつ全面的な後継者として、初めて社会科学的なレベルに社会指標研究を持ち入れた研究運動ではない。社会指標運動は、それ迄の社会指標研究の蓄積、特にその目的に対して、「政策貢献」あるいは“国家の状態”の把握という目的を新しく付け加える役割のものであった。

この社会指標運動の特殊性が自覚されていれば、社会指標運動＝アメリカ連邦政府の支援による政策貢献を目的とした社会指標構築の活動＝規範派のスタンスによる社会指標研究は、ある一つの社会指標のあり方として、記述派の思い描いていた社会指標と並存する可能性もあった。しかし運動の当事者も含めて既存の研究のほとんどは、社会指標運動を、それまでの社会指標研究を全的に受け継ぎ、社会指標というもの全てを全面的に展開させるものであると捉えてきた。そのことによって、記述的／規範的のどちらの方向性を社会指標運動がとるかが、社会指標そのものの排他的な定義となれるかどうかの譲れない論点となってしまったのだ。

社会指標運動を社会指標研究史の流れそのものとして捉えるのではなく、それまでの社会指標研究に対して（政策貢献のための）社会評価という新たな実践的利用の方向性を付け加えたものと捉えれば、その社会指標運動に対して、以下のような評価も可能になる。

第一に、社会指標運動によって提起された政治的な利用の可能性は、「福祉指標」や「行政（評価）指標」などといった方向性にも発展し、実践性を獲得している。第二に、それまで社会指標研究史をつくってきた、しかし漠然とした「社会指標」研究に対して、社会指標運動は明確に「政策貢献」という目的をもった社会指標研究群として現れた。このことによって、社会指標研究全体の活性化はもちろん、既存の研究の立場も自覚され、明確化された。ただし、その立場の明確化が強すぎたために、互いに他の立場の社会指標研究に対する不寛容な態度も形成してしまったが。第三に、先の二点より、「社会システムモデルの要素構築」や「社会変動の把握」という社会学全体の目標と重なってしまうような壮大な理論構築の目的に対して、政府の企画に乗った社会指標運動は、より現実的で実践的な目的を社会指標研究に与えた。また最後に、規範派も記述派も、社会指標の規範的利用に、程度の差はあれ賛意を示していることも明示的になることを付け加えておく。

そして、今日において規範的な社会指標が再び注目されているが、それは「社会変動の把握」や「社会システムモデルの要素構築」という探求が「やはり間違っていた」というわけではない。それはもう少し具体化が必要であろうけれども、社会指標という名を背負うには妥当な目標であるとも言えるだろう。社会指標運動の位

置づけに対する本稿の見方に基づけば、記述派が目指す社会指標の構築と規範派が目指す社会指標の構築は、二者択一的なものではない。規範派的な社会指標の定義や演繹的研究手順が見直されているとしても、それは記述派的な研究を損ねる現象ではないはずだ。

従って、社会指標運動衰退の理由には、既存の論点に加えて、その「運動」がまさに政策貢献という新しい目的をもった社会指標研究のものであったことが研究者たちによって正確に認識されなかった点が付け加えられる。この認識がなされなかったことによって、政策貢献という目標が、以前からの社会指標研究と並存可能であることが正確に理解されないまま簡単に否定されたのだ。この否定は、社会指標運動自体の否定であると同時に、社会指標研究の充実を妨げる結果となってしまっている。

現在の社会指標研究は、改めて規範的指標を評価しようとしているが、自らの言う「社会指標」を何の指標として想定しているのか、より自覚的でなくては、この「運動」と同様に、社会指標研究発展の可能性をみすみす逃す結果になるだろう。そして繰り返しになるが、特にその関心が規範的社会指標の方向性に向けられるとき、最も本質的な問題は、「構成段階からの規範的介入を認めた場合、どのようにして社会科学者としての構成判断の自律性を保つのか」として、発展的に考察されるべきであろう。

注

[1] その背景には、北欧諸国を中心とした福祉指標研究の発展もある（F. Rothenbacher（1993）など）。

[2]「社会指標自体の有効性を評価する」という次元の「評価」もありうるが、これについては、本稿の議論とは次元が異なるため詳細に触れることはしない。

文献

Andrews, F., 1989, “The Evolution of a Movement”, *Journal of Public Policy*, 9(4): 401-5.

Biderman, A., 1996, “Social Indicators and Goals”, in Bauer, R. ed., 1966, *Social Indicators*, Massachusetts: The MIT Press, 68-153.（＝小松崎清介訳，1976，『社会指標』，産業能率短期大学出版部.）

Blumer, M., 1983, “The Methodology of Early Social Indicator Research: William Filding Ogburn and ‘Recent Social Trends’, 1933”, *Social Indicators Research*, (13): 109-30.

Carley, M., 1981, *Social Measurement and Social Indicators: Contemporary Social Research*, HarperCollins Publishers Ltd.

Cobb, C. & C. Rixford, 1998, *Lessons Learned From The History Of Social Indicators*, Redefining Progress.

Duncan, O. D., 1969, *Toward Social Reporting: Next Steps*, N. Y.: Russell Sage Foundation.

Ferriss, A., 1988, “The Use of Social Indicators”, *Social Forces*, 66(3): 601-17.

Johnston, D., 1987, “The Federal Effort in Developing Social Indicators and Social Reporting in the United States during the 1970s”, in M. Blumer ed, *Social Science Research and Government: Comparative, Essays on Britain and the United States*, Oxford: Cambridge University Press.

Land, K., 1971, “On the Definition of Social Indicators”, *The American Sociologist*, (4): 322-25.

————, 1975, “Social Indicator Models: An Overview,” in K. Land & S. Spilerman eds., *Social indicator models*, N.

Y.: Russell Sage Foundation, 5-36.

———, 1983, “Social Indicators”, *Annual Review of Sociology*, (9): 1-26.

Noll. H. & W. Zapf, 1994, “Social Indicators Research: Societal Monitoring and Social Reporting”, in I. Borg& P. Mohler eds., *Trends and perspectives in empirical social research*, N. Y.: Walter de Gruyter, 1-16.

Olson M., 1969, “How Can We Do Better Social Reporting in Future?,” in DHEW ed., *Toward a Social Report*, Government Press, 95-101.

Rothenbacher, F., 1993, "National and International Approaches in Social Reporting”, *Social Indicators Research*, (29): 1-62.

Sharpe, A., 2000, *A Survey of Indicators of Economic and Social Well-being*, Canadian Policy Research Networks.

Sheldon, E. & H. Freeman, 1970, “Notes on Social Indicators: Promises and Potential”, *Policy Sciences*, (1): 97-111.

Sheldon, E. & W. Moore, 1966, “Toward the Measurement of Social Change: Implications for Progress”, in L. Goodman ed, *Economic Progress and Social Welfare*, New York: Columbia University Press, 185-217.

U. S. Department of Health, Education and Welfare, 1969, *Toward a Social Report*, Government Press.

（みた　あきこ、東京大学大学院人文社会系研究科、happiologist@hotmail.com）

（査読者　瀧川裕貴、渡辺彰規）

Location of the Social Indicators Movement and the "Normative / Descriptive" Controversy in Social Indicators Research

MITA, Akiko

In the Social Indicator Movement that had happened in the latter half of 1960's, there was a controversy whether the social indicator should be normative or descriptive. The purpose of this paper is to clearly arrange and understand this "normative / descriptive" controversy related to the definition of the social indicator.

In existing researches, the means of this controversy has been taken to whether there could be normative social indicators. However, to examine both the process of the Social Indicator Movement and the content of the controversy clarify the follow points. First, in fact, “whether or not there could be normative social indicators” could not be a conflict point. Second, in the social indicators research history, the location of the Social Indicators Movement should be understood as a period of appearance of a new type "social indicator" research of which the direct aim is the policy contribution.

This paper offers the next points; it is the cause of the controversy and the movement’ s decline that even concerning persons did not accurately understand these contexts, and the essential problem for today’ s normative social indicators researcher is to consider the method of autonomous composing social indicators.